

水草研究会会報

No. 2 November 1980

夫・三木 茂のこと

三木 民子

角野様より何か書く様にとのことで、亡夫の思い出でも書かしていただこうと思います。

京都時代、午後5時頃ひょっこりと帰宅、「今日は早いですね」と申しますと「夜汽車で九州へ行く」とのこと、「旅費は」「お前持っているだろう」「俸給前にありますか」しかたなく近所の友人に明日郵便局がいたら返すからと、借りて来て間に合わし、やれやれ。そんなことが度重なるので、頭をペコペコ下げて借りてこなければならぬからと、脂を充分絞ったのですが直りませんでした。晩年には余り出なくなりましたので、そういうこともなくなりました。ハッと思ったらすぐ飛び出すのでしよう。それにお金がなくなる迄うろつき廻り、空腹でその上京都駅からの電車賃さえ無くなり、列車で前に乗っていた方に事情を話し借りてきたこともありました。よく見えず知らずの者に借して下さったものです。

64才位の時でしたか、少し足がふらつくようになったと申し、毎朝うす暗い頃に起き出し、家の上の山を、二、三十分散歩していました。小雨位では止めず、三年程たちました時、足がしっかりしたと申ししていました。これは倒れます迄(72才の11月)つづいていました。意志の強い方には感心致しております。

日曜日等によく孫の手をひいて、家の上の山へ行き、木の葉をかんでみたり、かいで見、また持ち帰り始終牧野先生の植物図鑑と照らし合わせていました。いつの間にか孫がこれを見習い、未だ学校へも上らず字も読めないのに、木の枝を持ちかえり図鑑を一頁一頁繰り、その植物を見付け大喜びをしていました。この子は今もこの習慣は身につけているようです。

家の大事なことでも、何の相談をかけても、今忙しい、後でよいではないかと相談にのってくれませんでした。しかし姑が癌にかかり私は少しでも苦しみをやわらげられたらと、一生懸命に看病していました。そんな時姑は田舎へ帰ると言い出しました。田舎を離れて三年目、無理もないとは思いますが、こんなに自分を殺して看病しているのにとすると、涙が出て主人に話したら、「お前はなんと世間知らずなんだ、どんなに誠意を持ってしても認められるということはめったにないのだ。認められるということは余程幸運な時だ」と諷められました。意識して報いてほしい等と思ったことはないのですが、潜在意識があったのだなあと反省させられました。

結婚以来、手にはいり難い文献の抜き書、タイプ打、和文の文章直し、清書、校正等とさんざん手伝われましたがそのおかげで、1975年(三木亡き後)粉川様の御好意でレニングラードの国際学会に連れて行っていただけたのだと感謝しています。又この度のように水草研究会にお招きいただき、いろんな研究発表を拝聴させていただきました。水草の名前は頭に残っているものばかりで、とても興味がありました。又皆様方の温かいお心に接し嬉しく、今後共よろしく願い申し上げます。

苦勞は買ってでもせよ、と古人は言いましたが、苦しいことに真面目にとりこんでいますと、いつのまにかそれはプラスになって返ってきている、ということを感じている今日この頃です。

水草研究会のますますの御発展を祈念致します。あの世で苦笑致していることでしょう。